

伏見城城下町の家紋瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



図1 伏見城城下町で出土した家紋瓦

はじめに もっこう 木瓜紋や桐紋、三つ葉葵紋など、日本には数えきれないほどの種類の家紋があります。

平安時代に誕生したといわれる家紋ですが、戦国時代には甲冑やのぼりばた 幟旗・はたさしもの 旗指物、陣幕などに描かれ、戦場において敵と味方を区別する際に役立ちました。個人や家象徴する家紋は、屋根瓦の文様としても取り入れられました。家紋瓦は鎌倉時代に出現しますが、豊臣秀吉が大坂城や聚楽第を築き、城下町を整備するなかで広まってきました。当時の屋根瓦の文様は、軒丸瓦には巴文、軒平瓦には唐草文が主流でしたが(図2)、秀吉が築いた城の城下町では家紋とみられる様々な文様を表した瓦が出土します。

今回は、秀吉の最後の居城となった伏見城の城下町で出土した家紋瓦を紹介します。

伏見城と城下町 伏見城の歴史は、大きく4つの画期に分かれます。秀吉が「御隠居所」・「伏見御屋敷」として造営した第1期(文禄元年(1592)～)、隠居所としての「屋敷」を天守や石垣、惣構の存在する伏見「城」として拠点化する第2期(文禄3年～)、慶長の大地震後に再建された第3期(文禄5年～)、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が再建を行なった第4期(慶長5年(1600)～)です。

伏見城の城下町は、秀吉の第2期から整備が始まり、家康の第4期に再編成が行なわれたと考えられます。絵図や地名等から、伏見城城下町では大名屋敷の配置が推定復元されています。

城下町で出土した家紋瓦 図1-1は、梅文の金箔軒丸瓦です。前田利家・利長の屋敷跡推定地に隣接した地で出土しました。前田利

しずがだけ 家は、賤ヶ岳の戦いの頃に秀吉の家臣となり、五大老として秀頼の後見人を任されます。利長は利家とまつの中に生まれた長男で、加賀藩の初代藩主となりました。瓦は中央に小さい円を、外側に大きな5つの円を配し、梅の中房と花弁を表しています。前田家の家紋は、梅鉢紋であり、この瓦は前田家の屋敷で用いられていたと考えられます(第3・4期伏見城)。

図1-2は、よしのぶ 佐竹義宣・義隆の屋敷とされる地で出土した扇文軒丸瓦です(第4期伏見城)。佐竹義宣



図2 巴文と唐草文の金箔瓦



図3 伊達上屋敷出土の家紋瓦

は小田原征伐の際に秀吉の家臣となりました。義隆は、義宣の養子で、義宣の跡を継ぎ、出羽国久保田藩の藩主となりました。調査では、37点もの扇文軒丸瓦が出土しました。扇の骨は5本で、扇面には円が描かれています。佐竹家の家紋は、五本骨扇に月丸紋であることから、扇面に描かれた円は、日の丸ではなく、月を表したとみられます。

図3は、桃山町正宗で出土した鳥文の金箔軒丸瓦と竹文の金箔軒平瓦です。出土地名からも分かるように、調査地には伊達政宗の上屋敷があったとされます(第3・4期伏見城)。奥州を治めていた伊達政宗は、小田原城攻めに遅参したものの、秀吉の家臣となり、関ヶ原の戦いの後に初代仙台藩主となりました。軒丸瓦の鳥は、丸い目を持ち、羽を大きく広げ、尾は幅広く表されています。3の鳥は、右を向っていますが、左向きとみられるものも出土しています。軒平瓦には中央に竹、その左右に竹の葉が一枚ずつ配されたようです。伊達家は家紋に、三引両紋や竹に雀紋、九曜紋などを用いていました。調査では、数点の鳥文軒丸瓦と竹文軒平瓦が出土しています。それらを屋根に葺いた状態に復元すると



※ グレー部は反転させて復元した

図4 伊達上屋敷出土瓦の葺き上げ状態復元案

図4のようになり、伊達家の家紋である竹に雀紋を簡略化したものと考えられます。三引両紋や九曜紋を表した瓦は、仙台城からも出土していますが、この竹に雀紋とみられる瓦の組み合わせは伏見城でしか出土していません。

図5は、^{ながあきら}浅野長晟の屋敷とされる地(第3・4期伏見城)で出土した鳥羽文軒丸瓦の一部です。浅野長晟は、秀吉の正室ねねの義弟である浅野長政の子で、長兄の幸長が病死したため、家督を継ぎ、紀州藩主となりました。その後は広島藩主となっています。出土した瓦は、右の羽が上になるように2つの羽が交差しており、羽には羽軸や羽弁も凸線で表現されています。浅野家の家紋は違い鷹の羽紋です(図6)。長政の頃は左の羽が上になるように交差した文様でしたが、長晟の頃には右の羽が交差した文様を使用していたとされ、出土した瓦も右の羽が上となっています。

おわりに 今回は、伏見城城下町で推定されている大名屋敷所有者の家紋と、出土した家紋瓦の文様が合致するものの一部を紹介しましたが、この他にも様々な種類の家紋瓦が出土します。これらの家

紋瓦には金箔が施されたものも多く、城だけでなく、大名屋敷も豪華に飾られたことが分かります。

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、聚楽第の大名屋敷群は秀吉の家臣たちが競い合うように建て、屋根は「棟も屋敷の周囲の瓦もすべて種々の花や木の葉(模様)で飾られた黄金塗りで、・・・すこぶる高貴で豪華な様相」であったと記しています。聚楽第築造の後、天下一統を成し遂げた秀吉が築いた伏見城にも、聚楽第と同様に各地の大名の屋敷が軒を連ねる豪華絢爛な城下町が広がっていたのではないのでしょうか。

(松吉祐希)



図5 浅野屋敷出土の家紋瓦



図6 丸に右違い鷹の羽紋